

青年期における時間的展望と居場所感の検討

—居場所活動を実際に行う非営利活動任意団体に着目して—

○高嶋喜満人¹⁾ 井岡田涼²⁾ 井谷渚真也¹⁾

(¹⁾香川大学大学院医学系研究科 (²⁾香川大学教育学部)

目的

青年期には、アイデンティティ確立の基盤としての時間的展望という視点を取り入れることが重要である(都筑, 1993; 岡本・深瀬, 2013)。また青年期においては、様々な移行を支える場としての居場所を保証する必要性が強調されてきた(青木, 1996; 富永・北山, 2001)。居場所と時間的展望との関連は先行研究でも指摘されており、例えば大澤(2019)は、居場所の現場に兄弟姉妹のように近い将来モデル像が身近にすることで、今後の見通しを持ちやすいとしている。また、田中(2001, 2015)は、居場所の構成要素として、「場所」「人間関係」の他に、「未来への展望」を挙げている。

本研究で取り上げる居場所活動は、心理カウンセラーが若者人材育成を目的に始めた活動で、中学生から社会人までが参加していた。小学生対象のピア・サポート活動や多世代交流活動、対話の場、講演会を開催していた。

本研究では、居場所づくりの現場に参加する青年を対象に、居場所と肯定的な時間的展望との関連を明らかにし、青年期における居場所活動の意義を考察する。

方法

調査対象者 居場所活動に参加している青年7名。

調査方法 半構造化面接を実施した。質問内容は、「居場所の体験について」「体験を通しての過去、未来の展望の変化について」であった。

結果と考察

1. 近い将来モデル像との関わりによる変化

Aさんは、起業している社会人の方と話したことによって、「遠い先のことを見据えるようになった。」と語った。

Bさんは、LGBTや発達障害といった背景を持つ方々の人生観や仕事についての話を聞いたという体験から「自分はどのような(将来の)選択をしてい

くかについて考えた。」と語った。

Cさんは、将来について、やりたいことはあるが固まっていない状態であった。発達障害の方との対話やピア・サポート活動への参加を通して「将来のその自分がやりたいことのビジョンの方針がある程度こう絞られた。」と語った。

居場所に関する語りとして「世代を超えて話す環境」「人が来る場の居心地がいい」などが見られ、また異年齢の存在との交流を通して将来を考えていることから大澤(2019)の指摘を支持したと言える。

2. 自分自身について深く話せた経験による変化

Dさんは、自身の悩みを「お兄さん・お姉さん」的な存在に話せたという体験を通して、「自分が、こうして悩みを話せるのは、過去が良いと思えている結果」と語った。

Eさんは、他の参加者と家族について深く話をできたという体験から、自身の今までの家族関係を振り返ることができたと言った。

他者からの傾聴と受容をしてもらうという体験から本来感の高まりを経験し、自分自身への内省や過去の振り返りがなされている。居場所での人との対話を通して、過去への展望も促されると考える。

3. 居場所活動そのものをモデルとした変化

Fさんは、ピア・サポート活動で子どもたちの話を聴いてきたという体験から「将来は、話を聴いてきた体験を仕事先で生かしたい。」と語った。

Gさんは、地域の人との関わったという体験から「子どもにも地域に居場所を感じてもらいたい。そのために、(将来)失敗から学べる場を私が作りたい。」と語った。

子どもをサポートしてきた、イベントで主体的に活動してきたという居場所における役割感を通して、肯定的な将来展望が広がったと考えられる。